

朝日新聞 2025年1月29日

朝日新聞社に無断で転載することを禁じる

国

語

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

トランプ米政権が動き出した。個人的に気になっているのは、科学技術や環境・医療に関する政策の今後である。この件で日本でも特に注目されているのは、保健福祉省の長官にロバート・F・ケネディ・ジュニア氏が指名されたことだろう。彼は、かつて司法長官も務めた元上院議員のロバート・F・ケネディの息子で、元大統領のジョン・F・ケネディのおいにあたる。(a)「華麗なる一族」の一員として生を受けたわけだが、9歳で伯父を、また14歳で実父を暗殺で失うという悲劇に見舞われた。そのことも影響したのか、特に若い頃は素行が悪かったようだ。実際、彼は16歳の時にマリファナの所持容疑で逮捕され、寄宿学校からの退学処分も受けている。

それでも彼はハーバード大で歴史と文学を学び、またバージニア大ロースクールで法学の学位を取得、1982年にマーンハッタンの検察で働き始めた。だが、(b)麻薬とのAを切ることができず、翌年にはヘロイン所持容疑で逮捕されてしまう。

彼は罪を認め、保護観察と社会奉仕活動を命じられ、薬物治療センターに入った。このころにボランティアとして参加したが、人生の方向性を決めることになる環境保護団体「ハドソン川漁師協会」であった。

この団体は後に「リバーキーパー」と名を変えるが、ここでの活動をB切りに、彼は環境弁護士としての実績を重ねる。99年にはタイム誌がその活動を評価し、ケネディ氏らを「地球の英雄たち」としてたたえた。また水域保護のための環境保護団体ネットワーク「ウォーターキーパー・アライアンス」も設立している。

*

私は大学院生時代から若手研究員の頃にかけて、米国の環境問題の歴史に関心があったので、彼の名前は以前から知っていた。かなり《1》的なイメージで彼を捉えていたと思う。

それだけに、コロナ禍において彼が、極端な「反ワクチン」派の、陰謀論的人物として取り沙汰されていることには、驚かされた。そして今回、トランプ政権に入ると聞いて、まさにCを疑った次第である。

それにしても、なぜ彼は「変わって」しまったのだろうか。

歴史を振り返れば、米国の大企業がさまざまな環境問題や薬害などの原因を生み出したケースはいくつも見つかる。そして対抗する市民の側も、議会や行政に《2》的に働きかけるなどして、活発な運動を展開してきた。このように米

国は、異なるセクターがぶつかり合う緊張感の中で「正義」が実現すると考える傾向が強い社会であると言えるだろう。その際に行政は、企業と市民の間に立ち、法と科学に基づいて問題の解決に注力する役割を担う。また対立が法廷に持ち込まれることも少なくない。それらのシーンで重要な「D」となるのが、科学者による助言だ。

加えて、当然ながら米国は考え方の異なるさまざまな人々が混在する社会である。そのため、価値観の違いを超えて人々が合意しうる、数少ない共通のモノサシとして、ここでは「科学」が重要な役割を果たしてきた。だから米国において、科学者の発言は重い。それによって、裁判の結果すらもひっくり返るからだ。

*

だが、科学はそもそも万能ではない。常に絶対的に正しい知識を示してくれるわけではないのだ。特に、環境問題や生命科学など「なまもの」が関わる領域では、科学の不確実性は無視できない。行政機関や裁判所は、そういう「空気の薄いところ」でも、たとえば化学物質の毒性を評価し、開発による自然環境への影響を判断しなければならぬ。

また一般に不確実性の高い問題においては、専門家の間でも意見が割れることがある。そして裁判では、双方が自分たちには有利な証言をしてくれる科学者を連れてくるだろう。

ケネディ氏は、そのタイプの裁判に深く関わってきた。(c) 彼は、科学者たちが異なる証言をする姿を弁護士として繰り返し見てきたに違いない。だがその種の経験を重ねると、一種の「副作用」として、科学を「3」的なもの」と見なす傾向が強まる場合もあるのではないか。

(d) 科学も絶対ではない。だがそこを強調しすぎると、《4》な陰謀論の世界に入り込む。絶対ではないものの、他の知識や信念よりは信頼できる点が、科学の良いところだ。

また、まず覆らないだろうと思われる「岩盤的な知識」もあれば、まだ研究不足で不安定な領域もある。本当の専門家はその「相場観」を知っていて、科学を適切に活用できる。

だがその専門家への信頼が壊れると社会に^③疑()暗()が広がるだろう。

米国社会は二つに割れた。それは結局のところ、科学や専門家への信頼も含め、さまざまな相互の信頼が崩れたことを意味している。陰謀論はそんな「培地」で増殖していく。

有力な科学雑誌サイエンスはケネディ氏に対する長官指名について、「地球が平らだと信じている人がNASAのトップに就くようなものだ」という、著名なワクチン学者のコメントを載せた。辛辣である。

だが結局、ケネディ氏自身は、主観的には何も変わっていないのかもしれない。ハドソン川の自然を守っていたころと同様に、今も巨大企業と格闘するヒーローとして、自分を捉えているのではないか。しかし現実には、(e) 全く違

う「世界線」を彼は生きている。晩節を汚さないことを、期待する。

(神里 達博 「反ワクチン」派ケネディ氏、政権入りの衝撃 科学への不信、^④陰謀論の入り口)

問一 (a) (e) に最適な語を次の中から選び、記号で答えよ。

ア きつと イ すでに ウ 確かに エ まさに オ やはり

問二

A

D

 に最適な語を、それぞれ漢字一字で答えよ。

問三 《 1 》 《 4 》 に最適な語を漢字で答えよ。ただし、それらはすべて次のいずれかの語の対義語である。

安全 消極 絶対 否定

問四 傍線部①「なぜ彼は「変わって」しまったのだろうか」とあるが、著者がここで「「変わって」と表現した理由が判断できる部分を、本文中から二十六字以上、三十字以内で抜き出せ。

問五 傍線部②「観」の意味を意味上の第二段落から五字以内で抜き出せ。ただし、意味上の段落の切れ目は「*」である。

問六 傍線部③の () に最適な一字をそれぞれ答えよ。

問七 傍線部④「陰謀論の入り口」として筆者が考えていることを、本文中から十六字以上、二十字以内で抜き出せ。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今年も a、「薬」が不足しているらしい。特にせき止めが足りないという。最近では毎年のように、そんなニュースが報じられている。① いったい原因は何なのだろうか。

まず、「引き金」となったのは、2020年から翌年にかけて起こった後発医薬品メーカーの一連の不祥事である。医療用医薬品は一般に先発品（新薬）と後発品に分かれる。後者は「ジェネリック医薬品」とも呼ばれ、新薬の特許が切れた後に、製造販売される同等品のことを指す。

最も重大な事件は、福井県の「小林化工」の《①》である。水虫などの真菌症を治療するための経口薬に、通常の使用量の10倍から20倍の睡眠導入剤の成分が誤って混入していたというのだ。その結果、服用した人の中から、意識の消失や自動車事故を起こしてしまうなどの《②》が出た。また因果関係ははっきりしないが、死亡例も報告されている。

その後の調査の結果、同社では多数の「GMP違反」が発覚する。GMPとは、医薬品の製造や品質管理に関する基準である。（A）「サリドマイド事件」を《③》として1963年に米国で法制化された。同様の仕組みは日本にも導入されている。

また、他の後発医薬品メーカーに関しても、行政などが立ち入り検査を実施したところ、複数の社で問題が発覚、業務停止などの処分となった。こうして、一気に供給が減り、薬不足が生じたとされる。

しかし、すでに最初の事件発覚から4年が経っている。（B）いまだに安定供給が実現しないのだろうか。

*

厚生労働省も事態を重く見ており、新たに「安定供給体制管理責任者（仮称）」の設置をメーカーに義務づけるなど、対策を講じようとしているようだ。だが問題の本質は、ジェネリックの利用拡大を無理に急いだことにある、とは考えられないか。元々② 後発医薬品は日本ではあまり使われていなかった。だが02年の社会保険診療報酬改定の際、後発品を使えば保険点数が加算されることになった。当時は小泉内閣の時代、さまざまな新自由主義的政策の一環として医療費削減も掲げられ、その流れの中でジェネリックも推進されることになったのだ。

そして07年には、経済財政諮問会議が定める「骨太の方針」において、初めて後発医薬品のシェアに関する数値目標が記された。また安倍内閣では13年、「後発医薬品のさらなる使用促進のためのロードマップ」が定められる。そこには「18年3月末までに数量シェア60%以上」と書かれた。また17年には「20年9月までに80%以上」に引き上げられた。

（C）、小林化工は00年代半ばから急速に業績が拡大し、19年の売り上げは00年の（D）20倍以上にもなった。

まさに時代の波に乗ったこの企業は、b内側では無理を重ねていたのだろう。多数の不正に手を染め、最終的に《I》に至ったのだ。

ルールを《II》している優良なメーカーでも、実はジェネリックで利益を出すのは難しいという。政府による参入要件の《III》もあり、業界は競争が激化した。だが薬価は毎年のように引き下げられる。利益を出すには、新たに特許が切れた薬を次々手がけるよりないが、そうすると少量多品種生産を強いられることになるだろう。これは製造《④》に強い《IV》をかけることでもある。

c同じ製造ラインで別の薬を作るには、《V》した洗浄が必要だ。これはとても手間がかかるため、《⑤》の変化に機敏に対応するのは難しくなる。一連の不正も、このような現場に大きな《IV》がかかる中で起きたもの、とも考えられるだろう。

*

d、医薬品の不足と聞くと、最近よく報じられている「日本の国力の低下」の表れと受け止めた方もいるのではないか。昔はそんなことはなかったのに、と。だが実は近年、米国でも欧州でも、薬不足は深刻なのである。

実際、米国医療薬剤師会（ASHP）のレポートによると、24年第1四半期の時点で薬品不足が323件発生しており、01年に記録が開始されて以来、最多となったという。また欧州全土の病院薬剤師の95%が医薬品不足に悩まされているという報告もある。これはアジアなどへの原料依存が高まる中、パндеミックや戦争が拡大したことなどが影響しているとの指摘もある。

欧米と日本では、薬品不足の直接の原因は（E）同じではないだろう。しかし、経済性を過度に追求した結果、供給が不安定になったという点は、共通するのではないか。

冷戦終結から三十数年が経った。その間、世界はグローバル化が進み、経済性が優先される時代を迎えたといえる。（F）経済のグローバル化には合理的な面があり、私たちが豊かにしたのは間違いない。

だが何事にも得手不得手が、つまり「適用限界」がある。（G）、グローバル化や経済の論理、あるいは資本主義そのものも、「医療」という領域と、（H）「食い合わせ」が悪いと考えられるのだ。

それは結局のところ、本源的に多くの制約を負っていて、e不自由で、しかしだからこそかけがえのない私たちの「生身の身体」が、医療の本当の主役だから、ではないか。

（I）過去のものとなりつつある「冷戦後」という時代について、多角的、根底的な反省を迫られる、そんな時期に入ったのかもしれない。

（神里 達博「世界で不足する「薬」 医療に合わせ fの論理」）

問一 に最適な語を次の中から選び、記号で答えよ。

ア さて イ また ウ しかし エ つまり オ たとえば

問二 傍線部①「いったい原因は何なのだろうか」とあるが、筆者の考える原因を意味上の第二段落と第三段落からそれぞれ一つずつ、十一字以上、二十字以内で抜き出せ。ただし、意味上の段落の区切りは「*」である。

問三 《 ① 》 《 ⑤ 》 に最適な語を次の中から選び、答えよ。

「きっかけ」と同意の二字の熟語

「加害」の対義語

「供給」の対義語

「過程」と同意の外来語

「事例、場合」と同意の外来語

問四 傍線部②「後発医薬品」とは何か、本文中から二十一字以上、二十五字以内で抜き出せ。

問五 (A) (I) に最適な語を次の中から選び、記号で答えよ。

ア なぜ イ 恐らく ウ かなり エ すでに オ 確かに
カ いわゆる キ ちなみに ク なんと ケ 必ずしも

問六 《 I 》 《 V 》 に最適な語を次の中から選び、漢字で答えよ。

ふか かんわ はたん てっぺい じゅんしゅ

問七 に最適な語を本文から抜き出せ。

三

足跡Aと足跡Bの相違点を五十字以上、六十字以内、二文で述べよ。

A



B

